



金沢に生きる家。
金沢で生きる伝統。

伝統の技を、 未来に 輝かせる。

漆器や屏風、仏壇といった
工芸に荘厳な輝きをあたえる金箔。
その金箔の99パーセントを
生産する金沢にあつて
トップシェアを誇る今井金箔。
その四代目社長である今井康弘氏と、
ほそ川建設社長・細川顕司が
職人によるものづくりについて語りました。

湿度をよむ箔職人、 木を見極める大工。

細川 今は箔打機で金箔を作られていますが、昔はどうやって作られていたんですか。
今井 鎚(ハンマー)で叩いて作っていました。二万分のミリという限界の厚さに延ばすんですが、今でも厚みを調べる時は職人が光に透かして調べます。それで金箔づくりでもとても重要なのが、箔打ちで使う紙です。
細川 金箔を作る職人さんが箔打紙も作られるんですか。
今井 はい。手すきされた和紙に柿渋などを使って箔打紙を作ります。それで紙が乾燥しすぎると静電気で箔の延びが悪くなるので、この紙の湿り具合がとても重要になってくるんです。
細川 湿度を計るんですか。
今井 職人の経験です。
細川 昔の大工さんや左官屋さんも湿度を見極めていました。もともと木材に木表と木裏があり、乾燥すると変形するんです。
今井 雨季にも変形しますね。
細川 昔の職人さんは湿度による変形具合を見る目を持っていました。最近では工場でプレカットされるので大工が育ちにくくなっています。だから職人を育てるために若い人を積極的に雇われている今井金箔さんはとても共感できます。

ほそ川建設 代表取締役 細川 顕司
1978年生まれ。金沢市生まれ。大学卒業後に(株)大林組に入社。2008年にほそ川建設に入社し、2015年から代表取締役社長に。



(株)今井金箔 代表取締役 今井 康弘
1967年生まれ。神戸の金属加工会社を経て、92年に家業である今井金箔に入社。金箔の若手職人育成に力を注ぐ。

光だけでなく、陰をも 導んでいた日本人。

今井 もともと金箔は明かりを表現するものでした。例えば昔の家は暗かったこともあり、仏像の後ろに金箔を貼ったりしていました。しかし今では電気で家中を明るくすることができ、金箔が暮らしの中で使われにくい時代になってしまいました。

細川 確かに昔の家は薄暗かったですから、金屏風など金箔を貼ったものを家に置いて、光と陰を愉しむ暮らしをしていました。

今井 そうそう、肝心な所には金箔を使ったものを置いていました。

細川 光と陰をうまく使い分けるといのは日本的な考えで、陰翳礼讃という谷崎潤一郎の随筆にもあるのですが、住まいづくりにも使われていました。

今井 今は電気ですべて照らされてしまいますね。

細川 ただ私は、光と陰の陰影を愉しんだ昔の日本人の暮

らしに美しさを感じるんです。だから、私たちの提案する住まいでは、間接照明などを使って光と影による陰影のある空間づくりを大切にしています。

実用することで、 継承されていく伝統。

細川 店内の商品を見させていただいで、ガラスに金箔を挟んだ建材が面白いなあと思ったんですが、これも今井金箔さんで開発されたんですか。

今井 はい。最近では仏壇の需要が減ってきているので、新しい分野にも挑戦しています。

細川 そうなんです。伝統は実用することで継承されると思うんです。私たちは「金沢に生きる家」というコンセプトで、九谷焼や漆塗り、加賀友禅などの伝統工芸を建材として活用した住まいも提案しています。
今井 素晴らしいですね。職人さんの技術を継承していくためにもそうやって需要をつくることの方が一番大切だと思います。

